

A STUDY OF POLYSEMY

荻野隆聡

1. 序 論

本稿では、語の多義性について論じる。多義語か同音異義語かを定める基準はいくつか提出されているが、国広哲弥博士は『意味論の方法』の中で次のように述べておられる。

同音異義と多義の現象は、本質的に連続しているのであり、境界を定めようとするのがそもそも無理なことであると考えべきである。前に、意義素の外縁はぼやけていると考えべきだと述べたが (§ 2.2.7), 意味現象は至るところに連続的な部分を持っているとするのが筆者の意味観の一部である。(国広 1982a : 108)

多義性に関して論述を行う場合には、この点は非常に重要である。この問題については後述することにして、まず、多義語と思われる語について分析を試みたい。

2. 多面的多義とフレーム的多義

国広 (1989) では、日本語の名詞「学校」について詳細な分析を行っている。

- (1) 丘の上に学校が見える。《物》
- (2) 学校は4月1日から始まる。《活動》
- (3) 学校全体が新校長を歓迎した。《活動を実現する要素, この場合人間》
- (4) 彼は学校を出ていない。《機能》
- (5) 彼は学校を経営している。《組織》

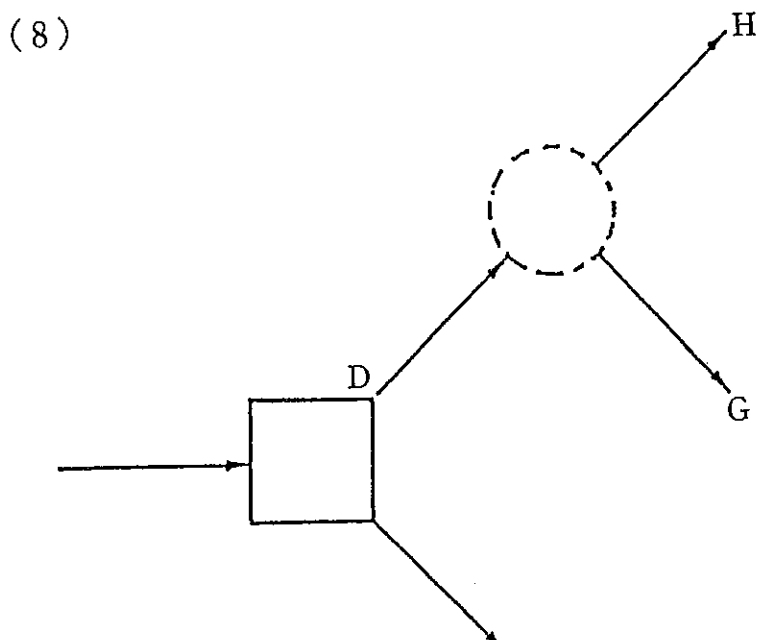
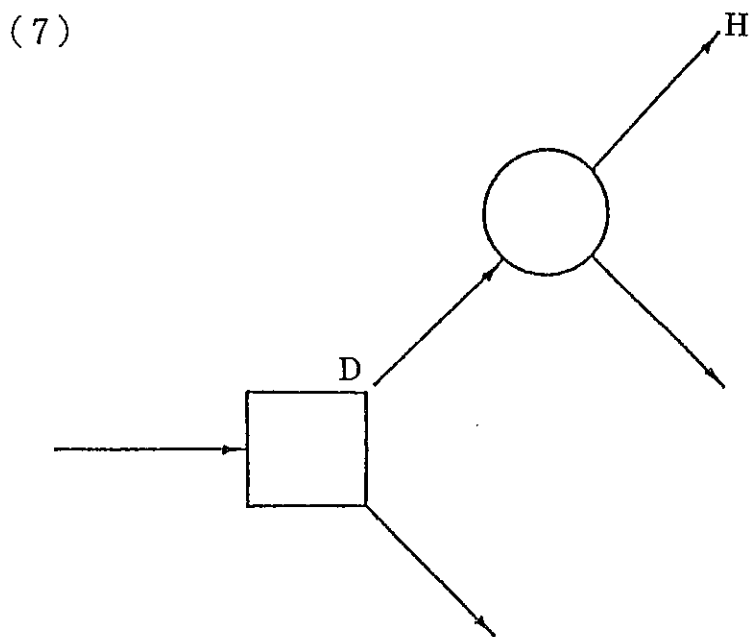
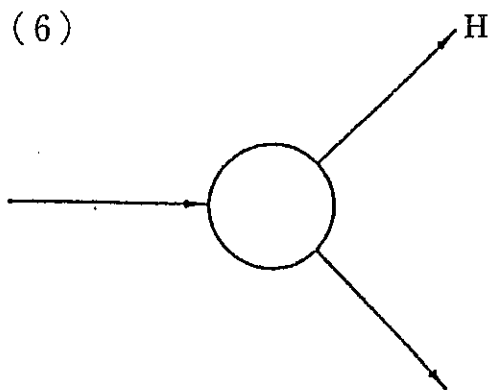
「学校」は、(1) から (5) までの《 》で表されているどの属性が欠けても成立しない。つまり、ある一面にだけ焦点を当てても他の面はその背景で語義を支えている。このような場合を博士は「多面的多義」と呼んでおられる。これは、名詞の場合であるが、動詞の場合は、動作が加わる。Fillmore (1992) は、英語動詞 'risk' の分析を試みている。詳細は実際の論文にゆずるが、要点を述べると、'risk' には異なった3つの用法があることを次の用例を掲げて説明している。

- (6) If you stay here you risk getting shot.
「ここにいると撃たれる危険がある。」
- (7) I had no idea when I stepped into that bar I was risking my life.
「私は、そのバーに入ったときに、自分が生命を危険にさらしていることに気付かなかった。」
- (8) I know I might lose everything, but what the hell, I'm going to risk this week's wages on my favorite horse.
「全てを失うかもしれないということはわかっている。しかし、それがどうしたというのだ。私は自分の好きな馬に、今週の賃金を賭けるつもりだ。」

Fillmore は、(6) から (8) の 'risk' の違いを次頁の様な図で表している。

使用される記号は以下の通りである。

- D = Deed (行為)
- H = Harm (被害)
- G = Goal (目的)
- = Chance (可能性)
- = Choice (選択)



(図1)

(図1)の(6)では、動作主の意志にかかわらず撃たれる可能性があるという意味で可能性を表す○が使われている。(7)では動作主が自分の意志で選択して行為を起こし、その行為の方向には被害が存在することを示している。つまり、「バーに入る」ことは動作主自身の意志によるもので、「バーに入ったこと」は動作主の意志とは関係なく危険なのである。(8)では、行為を行う点までは(7)と同じだが被害と目的が2者択一的である(1)。

‘risk’は(図1)のような背景的構造をもっていることを説明した上で、更に Fillmore は ‘risk’ の目的語を3種類に分類している。

(9) Most of us decided to risk the venture.

「我々の中の殆どの者は、その冒険的投資の話に危険を冒してでもものことにした。」

(10) You would risk death doing what she did.

「彼女がやったようにやれば、命を失うことになるだろう。」

(11) Now he was prepared to risk his good name.

「今では、彼は名声が失われることになりかねない危険を覚悟していた。」

(以上、例文は Fillmore (1992) より)

(9) から (11) では、それぞれ目的語の種類が異なり、(9)は ‘venture’ で Deed に当たる。(10)は ‘death’ で Harm, (11)は ‘his good name’ で「価値ある所有物」(Valued Possession, 以下 VP)である。

‘risk’には、(図1)で示したような「枠組」(以下、「フレーム」)があるので、上述のような3種類の目的語をとることが可能となる。この場合のフレームは次の Fillmore (1992) に基づく。

We speak of the structure lying behind a linguistic category as

making up a “frame”, and of its elements as “frame elements”.

「我々は、言語範疇の背景にある構造を
〈枠組〉と呼び、その構成要素を〈枠組構成素〉と呼ぶ。」

‘risk’の「枠組構成素」(以下、フレームエレメント)とは(図1)に示された Deed, Harm, Goal に Protagonist (動作主), VP を加えたものである。Chance, Choice は ‘risk’ に含まれる要素ではなく Deed に含まれる要素なので ‘risk’ フレームの要素とは考えない。このような考え方に基くと、(9)では、Protagonist が自分の選択で Deed を起こしその Deed の先には目的と Harm が存在する。これが ‘risk’ の意味であり、(10)は、Protagonist が「死」という Harm を被る可能性があると説明できる。(11)は Protagonist が VP を失うという Harm を覚悟していたと説明できる。ここで注目すべきは、多義語として認められる「学校」も ‘risk’ もその背景知識を考慮に入れるという点では同じ観点から語の意味をみているということである。

以下では、これらの先行研究を基に多義語の分析を試みる。

3. 英語動詞 ‘win’ の多義性

3.1 辞書の定義

動詞 ‘win’ を、LDCE で引いてみると、次のような記述になっている⁽²⁾。この辞書を用いたのは、定義が簡潔な英語で説明されているためである。各定義の後にその内容を日本語で示す。定義の頭の (I), (T) は、自動詞、他動詞の区別を意味する。

WIN :

1. (I, T) to be best or first in (a battle, competition, race, etc.) defeat

one's opponent (in).

「(戦闘, 試合, 競争などで最高位, 1位になる; 敵を負かす)」

2. (T) to gain or receive as a result of victory or success in any kind of competition.

「競争を伴う物事において, 勝利あるいは成功の結果として何かを手に入れる, 授与される」

3. (T) To gain by effort, ability, quality, etc.

「努力, 能力, 属性などによって何かを得る」

LDCE の定義は以上の様なものであるが, この語も 2 章で述べたようなフレームの中で考えるとその本質的な意味が見えてくる。

3.2 'win' のフレーム

'win' は大きく分けて「勝つ」と「獲得する」という 2 つの意味がある。ここでは, 現代英語でより中心的だと思われる「勝利」の意味を表す場合のフレームを考えてみたい。「勝利」を表す意味がなぜ中心的意味と考えられるかについては §3.3.2 で「獲得する」の意味と照らし合わせながら述べる。

'win' は単独では存在せずこの語が持つ背景的構造の中に位置して初めて意味を持つ。この背景的構造を, 仮に 'competitive' フレームと呼んでおく。'competitive' フレームのフレームエレメントは, 次のようなものであると考えられる。

[COMPETITIVE FRAME]

- ◇ Competitive event 「競争を伴う場」
- ◇ Protagonist (s) 「動作主」
- ◇ Opponent (s) 「競争する相手」
- ◇ Valued object 「価値ある対象物」(以下 VO)⁽³⁾

(図 2)

(図2)の【 】がフレーム、◇がフレームエレメントを表している。(図2)を簡単に説明すると次のようになる。

まず‘win’という概念が成立するためには何らかの意味で競争を行う場が必要である。そしてこの場自体が目的語になる。(Competitive event) 動作主は通常1人であるが、チームとして競う場合もあるので複数とも考えられ得る。(Protagonist (s))

次に競争を行うのであるから、Protagonistの他に競争相手が不可欠であり競争相手は1人、またはそれ以上である。(Opponent (s))

また、この競争においてはVOを獲得することが目的である。これはトロフィーなどのような具象物の場合もあれば「勝利すること」自体(‘win a victory’ という場合を考えられたい)のような抽象物の場合もある。ここで‘win’の対立概念として‘lose’について若干述べる必要がある。つまり競争においては、「勝者」のみが存在して、「敗者」が存在しないということとはあり得ない。‘win’の分析の立場からみると、Protagonistが「勝者」、Opponentが「敗者」となる。

3.3 他動詞用法

3.3.1 目的語が Event の場合

目的語が Event を表す場合の用例を示す。これは「競争を伴う場」というような意味である。以下全てこのように解されたい。

まず用例を見ていくことにする。

(12) Slow but steady wins the race.

(諺)「急がば回れ。」

(13) He was not just teasing Colin; he was challenging him. This

was a battle of wills, and in some way that Colin could not grasp, the outcome would determine their future together. He also sensed, without truly understanding why, that if he didn't win this contest he would live to regret it with all his heart.

(Dean R. Koontz, *The Voice of the Night*, p. 72)

「(コリンが、友達のロイに腕をつかまれているという状況で) ロイは、単にコリンをからかっていたのではなかった。彼はコリンに挑戦していた。これは意志の戦いであり、コリンには理解できなかった。ある意味ではこの戦いの結果が、彼らのこれから先を決めることになるだろう。コリンは、どうしてもかは全く分からなかったが、この戦いに勝たなければ心の底から後悔して一生を送るだろうと感じた。」

- (14) I've never won an argument with him. (George Lakoff and Mark Johnson, *Metaphors We live By*, p. 4)

「私は、彼と議論をして勝ったことがない。」

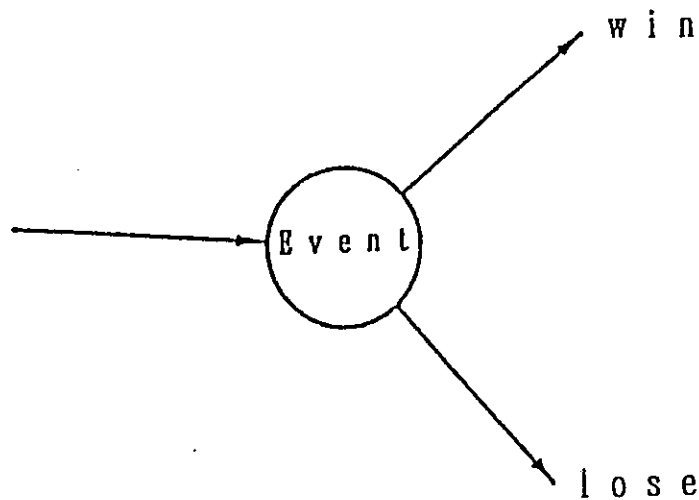
この他に、Event を表す目的語として、game, competition, poker, bet, lottery などが挙げられる。

'win' がこの種の目的語をとる場合は、その意味は (15) のようなものとなる。

- (15) その Event において最も優位に立つ。

(15) はちょうど、LDCE の 1. の定義に当てはまる。図示すると (図 3) のようになる。

つまり、Protagonist が Event において競争相手と何らかの競争を行い、その競争で最も優位に立つというのが 'win' の意味である。(図 3) で示しているように Event を表す語を目的語としてとる場合は、反義語 'lose' が



(図3)

裏に含まれている。つまり 'lose' と 'win' は同時成立の関係にあり、このため両語の反義関係は成立する。Event において 'win' しなければ 'lose' であり、'lose' しなければ 'win' である。§ 3.3.2 で述べる目的語が VO の場合は 'win' の反義語は 'lose' にならない。この反義語の相違により 'win' は多義であるといえる。また引き分けという可能性もあるが、これは特殊な場合であり、今はフレームの中で 'win' の意味ををみているのでこの可能性は考えない。

3.3.2 目的語が VO の場合

§ 3.2 で、'win' は「勝利」を意味する場合が中心的であると述べたが、本項で扱う目的語が VO である場合がなぜ「勝利」の意味から派生すると考えられるのか歴史的、文化的観点から述べてみたい。語源辞典を開くと次のようにある。

WIN :

to gain by labour or contest, earn, obtain. (E.) The orig. sense was to fight, struggle; hence to struggle for, gain by struggling.

(Walter W. Skeat: *Etymological Dictionary of the English Language*)

「労働あるいは争いによって得る, 手に入れる, 獲得する。元来英語にあった語。元々の意味は, 戦う, 懸命に努力する。この意味より, 何かを得ようと努力する, 努力して何かを得る。」(訳は, 荻野)

この記述で興味深いのは, 現代英語では 'win' の本来の意味である「戦う, 懸命に努力する」の意味がこの意味だけではもはや成立しなくなっていることである。現代英語では「戦い, 懸命に努力した」結果, 勝利するという点に焦点が当てられている。つまり, 勝利し, 結果的に 'cup', 'title' などの VO を獲得することになり, 「勝利」を表す意味の方がより中心的だといえる。文化的にみれば, 事物を得るためには敵と競って勝者のみが得ることが出来るという西欧社会に特によく見られる特徴が現れている。この元来の中心的意味が廃れ, 周辺的であった意味が中心義になる類例として英語動詞 'tell' が挙げられる。この 'tell' は「数える」というのが原義だったが現代英語ではこの意味が薄れ, 「語る, 伝える」が中心義となっている。原義は 'teller' (出納係) に残っている。

以下では, 用例を観察しながら考察を進めていく。

- (16) I still think we're in good position to win a third straight title.

(Hoop, Volume XIX, Issue 7, p. 4)

「私が, 我々のチームが3年連続 NBA (National Basketball Association) タイトル獲得への好位置につけている, と思っていることに変わりはない。」

- (17) French soccer fans from Nante to Nice were dancing in the streets in May, celebrating Olympique Marseilles's defeat of AC Milan to win France's first European Champion's Cup.

(Time, July 12, 1993, p. 4)

「ナントからニースに至る地域から集まったフランスを支持するサッカーファンは5月に、オリンピックマルセイユがACミラノを破り、フランスにとって初めてのヨーロッパチャンピオンカップを獲得したことを祝って、通りで踊り狂っていた。」

- (18) The skin on his body was too tight to pinch. In 1950 he had jumped into Wonson, Korea, with the Second Ranger battalion, been captured, escaped, returned to his unit, and won the Distinguished Service Cross.

(Robert B.Parker, *Wilderness*, p. 35)

「彼の肉体は、つまむことができないほど鍛えられていた。彼は1950年に、第2レンジャー部隊と共に、韓国の元山（地名）へ入り、その地で捕虜となりその後脱走し、彼が属していた部隊に戻った。その後、彼は殊勲十字章を受けた。」

これらは全て具体物が目的語になっている。(16), (17) は, 'win' が目的語に対して積極的に働きかけ, それぞれ 'a third straight title', 'France's first European Champions' Cup' を獲得しようとしている。しかしながら (18) は, (16), (17) とは性質が異なる。この用法は, 国広博士のいう「痕跡的認知」の一種と言える。この考え方は初め, 国広 (1982b) で提出され, 国広 (1985) で実際に「痕跡的認知」という術語が使われている。国広 (1982b) では次のような用例を掲げ, 以下のような解説を加えている。

(19) a. そのレストランは町をハナレタ所にあった。

b. そのレストランは町をハズレタ所にあった。

ところで 7a (=19a), b (=19b) は共に位置関係を述べているだけで, 場所が実際にハナレルとかハズレルとかの移動をしたわけではない。しかしこの場合, 移動を含まない別の意味を認める必要はないと思われる。これは, あたかも場所のように本来は動かないものが移動した結果であるか

のようにとらえて位置関係を示す一種の表現法（動的動詞の静的用法）であると解釈すれば、両動詞は基本的に移動のみを表すのだとしてよいことになる。（国広 1982b : 31）

上で言われているのは動作を含む場合であるが、(18) も基本的には「痕跡的表現」と解される。(18) では、目的語である VO を獲得することが目的ではないのだが、あたかもそれを努力して獲得したように表現している。(18) において、‘the Distinguished Service Cross’ は「彼がレンジャー部隊に従軍した」結果として受けたものであり、これを獲得しようとして従軍したのではない。実際は ‘the Distinguished Service Cross’ を得ることが目的ではないのだが、あたかもこれを獲得するために努力したように表現している。

‘win’ についても、基本的には対象物を積極的に獲得するという意味のみ認めておけばよいと思われる。

次に (16) から (18) とは異なり、抽象物を目的語にとる用例を示す。

- (20) In a visit to Beijing last week, Britain's Foreign Secretary Douglas Hurd won agreement only to speed up Sino-British negotiation on the transition to Chinese rule. (Newsweek, July 19, 1993, p. 16)

「(香港の中国返還について) イギリスの外務大臣ダグラス・ハードは、先週の北京訪問において、中国、イギリス間で香港を中国の支配下におくという交渉を早めるだけの同意に達した。」⁽⁴⁾

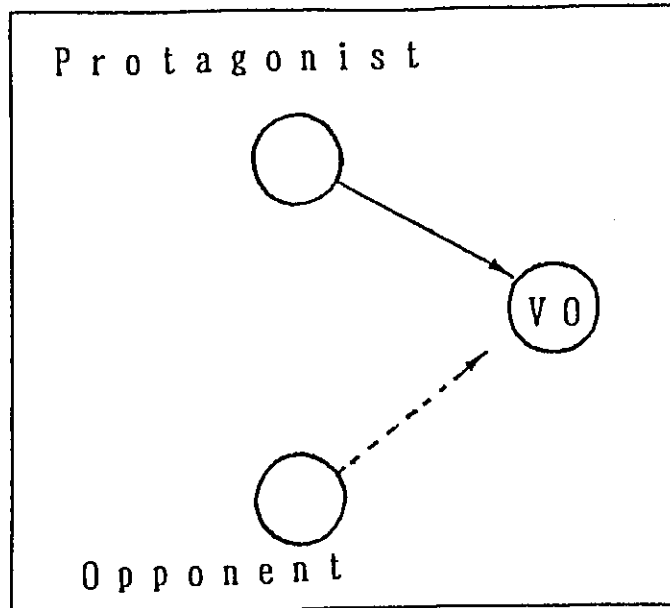
- (21) In the semifinals, Sampras put on a show of graceful tennis that won warm applause from the crowd as he left.

(Japan Times, July 4, 1993, p. 24)

「(1993年のウィンブルドンテニスの) 準決勝で、サンプラスは華麗なテニスを披露し、彼がコートを去る時には、その試合に対し

て暖かい拍手が送られた。」

前頁の (20), (21) の用例では, 目的語が抽象物であるが, 何らかの意味で, 動作主に対して価値のあるものとなっている。(20) では「交渉を早める」ための同意は「ダグラス・ハード」にとって価値がある。(21) では「暖かい拍手」を送られることは「テニスの試合」にとって価値のあるものである。以上の目的語が VO である場合の意味を図で表すと次のようになる。



(図4)

(図4) のフレームエレメントの外を囲む四角は Deed を含む Event を示している。'win' した者 (Protagonist) から出ている矢印が VO に接している所が 'win' の意味である。参考までに, この場合 'lose' は § 3.3.1 で述べたように 'win' の反義語とはならない。

前述の 'risk' の分析では, 'risk' の目的語が Harm を表す場合があったが, 'win' は意味の性質上, Harm を表す目的語はとれないということはいうまでもない。

3.4 自動詞的用法

本項では、自動詞的用法を用例を観察しながら検討してみたい。

- (22) Says a 25-year-old psychology student: "At the beginnig, people said, 'we're united.' Everyone seemed happy because we're together. We'll survive. We'll win. We'll share all the crappy parts of life. But now..." her voice trails off. (Newsweek, July 19, 1993, p. 26)

「(サラエボの現状について) 25歳の心理学を専攻する女子学生は次のように言う。初めのうち人々は、「我々は一一致団結しているのだ」と言っていた。その頃は皆、幸せそうに見えた。なぜなら我々は団結しているという意識が強かった。我々は生き抜き、勝利し、生きていく上での、どのような困難も共に分かち合おうと思っていた。しかし、今では…。」

- (23) The series ended at the Boston Garden where New York, led by Frazier's 25 points, won 94-78.

(Hoop, Volume XIX, Issue 7, 1993, p. 60)

「そのシリーズ (1973年のアメリカプロバスケットボールの決勝シリーズ) は、フレイザーの25得点をあげる活躍により94対78でニューヨークが勝利を収めて、ボストンガーデンで幕を閉じた。」

- (24) "I was so overwhelmed by the desire to win that I had difficulty in moving my body," said Akebono after the session.

(Japan Times, May 1, 1993, p. 19)

「勝ちたいという気持ちばかり先行してしまって体が思うように動かなかった、と曙は横綱総見の後に語った。」

(22) から (24) は表面的には、目的語が現れないという点で自動詞として分類される。しかしながら、意味の上から見れば、目的語が省略されていると考えられ、他動詞として解される。これらの用例は全て「何かと戦い、勝利する」という意味であり、‘win’が「勝利する」の意味で使われる際には、先に述べた Event の目的語をとる。それぞれの目的語を明示すると、次のようになるだろう。

	補い得る日本語
用例 (22)	the war
用例 (23)	the game
用例 (24)	the match (取組)

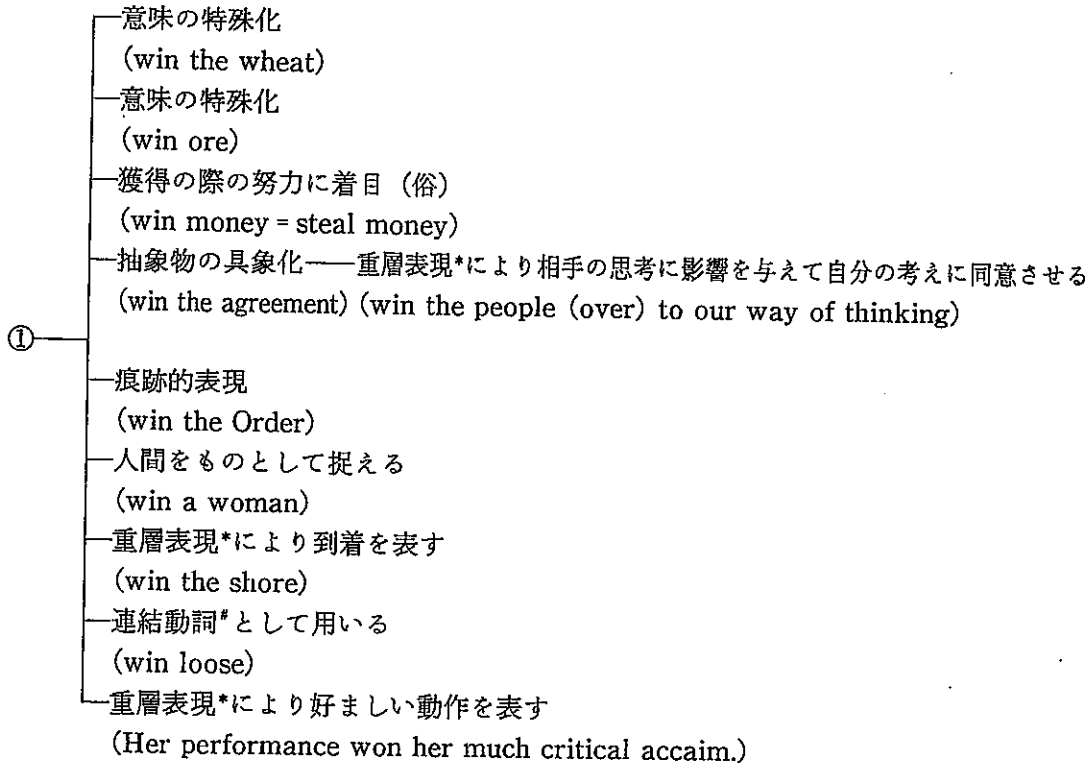
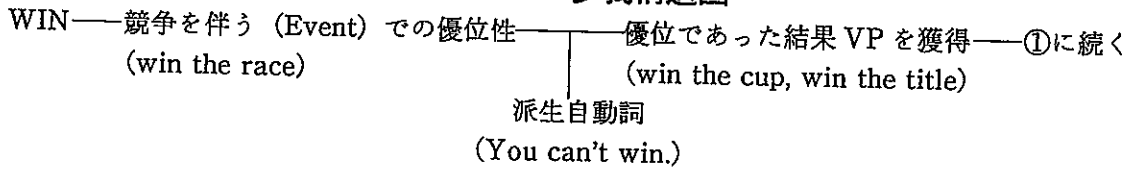
(表 1)

(22) から (24) では、上のような目的語が想定されていて、(15) で示した意味を持つ。また逆の面からみると、目的語が省略出来るのは、目的語が Event の場合だけであることが分かる。(16) の ‘a third straight title’ (17) の ‘France’s first European Champions’Cup’, (18) の ‘the Distinguished Service Cross’ は省略出来ない。これらの目的語を省略してしまうと、文の意味が成り立たなくなってしまうからである。(22) から (24) は文脈の助けにより目的語を省略出来る。従来の文法的観点から目的語が VO の場合と Event の場合を比較すると、前者の方が後者よりも他動詞的要素が濃いといえる。

3.5 ‘win’ の意味派生

これまで考えてきた ‘win’ の意味とそこから派生する様々な意味は次頁 (図 5) のような多義構造図で表される。

‘WIN’ の多義構造図



*重層表現については§ 3.6 で述べる。

#連結動詞については§ 3.7 で述べる。

(図 5)

3.6 重層表現

前節までは、言うなれば ‘win’ のプロトタイプの意味を考察してきたが、本節では、表現上は ‘win’ が使われているが、実際には基となる表現がありその上に ‘win’ が重ねられて使われていると考えられる用法についてみていく。

(25) The army’s lack of leverage over Abiola may have been what

won him the election.

(Newsweek, July 19, 1993, p. 9)

「(ナイジェリアの大統領選挙でアビオラ氏が当選したことに関して) 軍部との結びつきがない点が、アビオラ選挙での勝因の1つとなった。」

(25) の用法は、筆者が調べた LDCE, COD, CED, OALD, WNWD, COBUILD の 6 冊の英英辞典のうち LDCE, OALD の 2 冊のみが取り上げ、用例を載せていた。

(26) By her hard work she won herself a place at university.
(LDCE)

「彼女は懸命に働いたので、大学に勤めることが出来た。」

(27) Her performance won her much critical acclaim. (OALD)

「彼女の演技は、彼女の名声を決定づけた。」

(26) は先に示した、LDCE の 3. の定義の用例として掲載されている。この用法は、辞書の掲載状況から察すると、比較的新しい用法であると思われる。これらは、直接目的語が VO となっている。この表現の裏には (28) のような表現が想定されていると考えられる。

(28) to give IO + DO

IO は間接目的語、DO は直接目的語を表す。すなわち (28) が下地として存在し、その上に 'win' を重ねて用いている。この表現方法を国広博士は「重層表現」と呼んでおられる。

イディオム論では例えば 'thread one's way through the crowd' 「人

ごみの中を縫うようにして進む」は 'make one's way through~「~の中を進む」の変異型 (variation) である, というふうに説かれる。しかし意味論的に考えると, これは原型と考えられる 'make' に他の動詞が取って代わるという過程を経ているのではなく, イディオムとしての 'make one's way' の上に 'thread' が重なっていると考えるべきであろう。そうしないと, 例えば 'find one's way' が字義通りの「自分の道(方法)を見つける」と, イディオムとしての「道を見つけて進んで行く」のふた通りの意味になることが説明できなくなる。(国広 1967: 121ff)

つまり, (25) から (27) は 'give' と 'win' が交換可能なのではなく, この2語の意味要素が混ざり合っていると考えるのである。

もう1つ重層表現と考えられる用法が認められる。手元の用例にはなかったので前出の6冊の辞書を開くと, COBUILD, OALD, WNWD の3冊がこの用法を取り上げ, OALD のみが用例を掲げていた。また英和辞典では『プログレッシヴ英和』, 『ラーナーズプロレッシヴ英和』, 『リーダーズ英和』, 『ランダムハウス英和』の各辞典がこの用法を載せていた。『リーダーズ』のみ用例がなかった。

(29) She's against the idea, but I'm sure I can win her over. (OALD)

「彼女はこの考えに反対だが, 説得して同意させてみせるよ。」

(30) We must win the people to our way of thinking. (『プログレッシヴ英和』, 『ラーナーズ』も同例)

「人々を説得して我々の考え方に賛同させなければならない。」

(31) The speech won them over [or round] to our side [view]. (『ランダムハウス英和』)

「その演説で彼らは我々の味方になった [考え方に同調した]。」

この用法も, 重層表現と考えられ裏には (32) という表現があるものと考

えられる。

(32) to talk someone over (to)

更なる重層表現の例が見られる。

(33) They won the camp by noon. (小西友七編, 『英語基本動詞辞典』, 研究社) 「昼までに彼らはキャンプにたどり着いた。」

(34) They won the shore through a violent storm. (ibid.)
「激しい嵐の中をようやく一行は岸に着いた。」

「場所に達する」という意味を持つ語, あるいは句はいくつかある。最近刊の『ロングマン英語アクティベータ』(Longman Language Activator.) で 'arrive' を引いてみると類義語として, 'arrival', 'get there', 'get to', 'reach', 'make it' が掲載されている。この中で上の用例の「動詞+場所を表す目的語」の形に合うのは, 'reach' のみである。'arrive' 自体は自動詞で, 場所を表す目的語をとる場合は通常前置詞を伴うので (34), (35) の形に合わない。『アクティベータ』の説明は次のようである。

REACH :

to arrive at a place, especially after a long or difficult journey.

「場所に到達する, 特に長期間のあるいは困難な旅の後の到着を暗示する。」(訳は, 荻野)

つまり 'reach' も「努力を伴う」という含みを持っているが, (33) から (34) ではその上に 'win' の「努力を伴った上で獲得する」という含みが重ねられ, 目的語があたかも VO であるかのように表現されていると考えら

れる。

3.7 連結動詞としての 'win'

(35) He won loose from the crowd. (前出『英語基本動詞辞典』)

「彼は人混みからやっと逃れた。」

(36) win clear and escape. (『ランダムハウス英和辞典』)

「うまく抜け出して脱出する」

この用例は 'break loose', 'come loose', 'set free' などの形からの類推によると思われる。これらの基形の上に 'win' を重ねた重層表現とも考えられるが、この2例においては 'win' が連結動詞として用いられていると解したほうがよいと思われる。G. Leech と J. Svartvik による *A Communicative Grammar of English* では連結動詞 (linking verbs) を2種類に分類している。

There are two groups of linking verbs: CURRENT LINKING VERBS and RESULTING LINKING VERBS.

Current linking verbs, such as 'look' and 'feel', indicate a state. [中略] Resulting linking verbs, such as 'become' and 'get', indicate that the role of the verb complement is a result of the event or process described in the verb:

(Leech and Svartvik 1975 : 298)

「連結動詞には二種類ある。現状を示す連結動詞 (CURRENT LINKING VERBS) と結果を示す連結動詞 (RESULTING LINKING VERBS) である。

look (見える) や feel (感じられる) のような現状の連結動詞は、ある状態を示す。 [中略]

become (...になる) や get (...になる) のような結果の連結動詞で

は、動詞の補語の役割は動詞が表す出来事や過程の結果を示すことである：」〈下線は本文では傍点〉（日本語訳は池上嘉彦，池上恵子訳，『現代英語文法——コミュニケーション編』紀伊国屋書店より）

(35) と (36) での 'win' の用法は Leech, Svartvik がいうところの結果を示す連結動詞であると考えられる。(35) の場合ならば、「努力した結果自由になる」というように，(36) では「努力した結果，障害物がなくなる」と解される。

一般化すると，この用法は，'win' が連結動詞のように用いられ，努力を伴う行動をした結果の，動作主にとって好ましい状態を表しているといえる。「努力する」というのは通常何か良い結果が出ることを目的としているので好ましい状態しか表さない。

4. フレームと多義性

ここまで Fillmore の提唱するフレームという考え方と 'win' の多義性について論じてきたが，本章では 1 章で棚上げにしていた同音異義と多義の現象について考えてみたい。

この 2 つの言語現象を考える際に最も重要なのは共時論的観点であり，語源は関係ないということである。F. R. Palmer は，次のように述べている。

This is, however, far from satisfactory, for the history of a language does not always reflect accurately its present state. For instance, we should not usually relate 'pupil' (= student) with the pupil of the eye, or the sole of a shoe with the fish sole. Yet historically they are from the same origin, and as such are example of polysemy. Yet in the language of today they are pairs of unrelated

words, i. e. homonyms.

(Palmer 1981 : 102) <下線は萩野>

「この扱い方（語源により多義，同音異義を区別すること）はとうてい満足のいくものではない。言語の歴史は常に正確に現在の状態を映すものでもない。たとえば，pupil「生徒」と目の pupil「瞳」や，靴の sole「底」と魚の sole「かれい」とを関連づけるべきではない。だが，歴史的にはこれらは同じ起源であって多義語の例となる。それにしても，現在の言語では関係のない語で，すなわち同形異義語である。」（日本語訳は川本喬訳，『意味論入門』，白水社より，かっこ内は萩野）

国広（1982a : 104）でも同様のことが述べられている。本質的には同音異義と多義は，意味的関連性により区別されるが，この意味的関連性の有無を測る指標として，本論で述べてきた Fillmore のフレームという考え方が有効であると思われる。つまりある 2 つ以上の意味が，同じフレームで考えることが可能であれば多義，不可能であれば同音異義となる。前出の例に即して考えれば①‘pupil’ (= student) と②‘pupil’ (of the eye) は同じフレームで考えることが出来ない。①は「学校フレーム」の中で捉えられ，②は「顔フレーム」のようなフレームの中で捉えられる。このようにフレームが異なるので自ずと意味的関連性も感じられなくなる。

フレームの中で語義を考えるという方法は多義語の分析に限らず意味分析にとって有効な方法であろうと思われる。

付 記

本稿は，神奈川大学外国語学研究科修士課程修了時の修士論文を加筆訂正したものである。修士論文作成の際に，筆者を多義語の分析という興味深い分野に導いて頂いた国広哲弥先生に心から御礼申し上げます。また神奈川大学の諸先生方，外国語学研究科の方々にも貴重なご意見を頂きました。記して感謝いたします。

注

- (1) (図1)の(8)の点線で描かれた○印は Deed が Protagonist の意志によって行われることを意味している。しかし, Fillmore (1992) では誤植により実際には点線ではなく実線で描かれている。
- (2) 使用した辞典については本稿末尾の辞典略号を参照。
- (3) 'risk' の場合は既所有物が対象なので 'Valued Possession' でよいが, 'win' の場合, 既所有物を目的に競争するわけではなく, 'win' した結果手に入れる具象物, 抽象物が対象である。故に 'Valued Object' とした。
- (4) 用例で使用した "Newsweek" の日本語訳に関しては, 一部「ニューズウィーク日本版」を参考にした。

辞典略号

英英辞典

CED : *Collins English Dictionary*. Third Edition, HarperCollins Publishers, 1991.

COBUILD : *COBUILD English Learner's Dictionary*. William Collins Sons & Co Ltd, 1989.

COD : *The Concise Oxford Dictionary of Current English*. Eighth Edition, Oxford University Press, 1990.

Longman Language Activator. Longman, 1993.

LDCE : *Longman Dictionary of Contemporary English*. Second Edition, Longman, 1987.

OALD : *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. Fourth Edition, Oxford University Press, 1989.

WNWD : *Webster's New World Dictionary of American English*. Third College Edition, Simon & Schuster, Inc., 1989.

英和辞典

『プログレッシブ英和辞典』第2版, 小学館, 1987.

『ラーナーズプログレッシブ英和辞典』小学館, 1992.

『ランダムハウス英和大辞典』第2版, 小学館, 1994.

『リーダーズ英和辞典』研究社, 1984.

参考文献

Fillmore, Charles J. (1992), "Corpus linguistics" or "Computer-aided arm-chair linguistics", Jan Svartvik (ed.), *Directions in Corpus Linguistics*. Mouton de Gruyter.

国広哲弥 (1967), 『構造的意味論——日英両語対照研究』, 三省堂.

——— (1982a), 『意味論の方法』, 大修館書店.

——— 編 (1982b), 『ことばの意味3——辞書に書いてないこと』, 平凡社.

——— (1985), 「認知と言語表現」, 『言語研究』第88号, 日本言語学会.

- (1989), 「多義と認知」, 『日本エドワード・サピア協会ニューズレター』第3号, 大東文化大学, 平林幹郎研究室.
- 小西友七編 (1980), 『英語基本動詞辞典』, 研究社出版.
- Leech, Geoffrey and Svartvik, Jan (1975), *A Communicative Grammar of English*. Longman.
- 邦訳, 池上嘉彦, 池上恵子訳 (1977), 『現代英語文法——コミュニケーション編』, 紀伊国屋書店.
- Palmer, Frank R. (1981), *Semantics*. Second Edition, Oxford University Press.
- 邦訳, 川本喬訳 (1978), 『意味論入門』白水社 (ただし, これは第1版の邦訳)
- Skeat, Walter J. (1910), *An Etymological Dictionary of the English Language*. Reprinted in 1983, The Clarendon Press, Oxford.